

いつまでも自分らしくありたい、この願いを阻むのが「認知症」です。厚生労働省研究班の推計では認知症とその予備軍の合計は約860万人で、今や65歳以上の高齢者の4人に1人という多さです。

先日、認知症の徘徊から行方不明になる人が年に一万人もいるという報道がありました。また徘徊による鉄道事故で、家族の監督責任を認め、損害賠償を命じる判決が下りたという報道もされました。これらの報道は、急激に認知症人口が増大する中で衝撃を与えるものでした。

家族だけで24時間監督することは不可能です。責任だけが強調されると、認知症の人を外に出さないなど、リスクを減らすためとはいえ本人の尊厳が損なわれることになりかねません。

実際、認知症になってもその人のすべてが失われるわけではないのです。表に出にくくなくてもその人らしさは確かに存在します。周囲の理解と手助けがあればやれることも増え、住み慣れた家で穏やかに暮らし続けていくことが可能です。

ちょうど10年前、「痴呆」の呼び名が「認知症」に変更されたことを契機として「認知症を知り地

## 「その人らしさと寄り添うために」

域をつくる十か年」のキャンペーンが始まりました。「認知症サポーター」の養成はこのキャンペーンの一環です。

認知症サポーター養成講座を受講した人を認知症サポーターと呼びます。何か特別なことをする人ではありません。講座を通じて認知症についての正しい知識を習得し、駅や路上などで困っている人に声がけするなど、自分のできる範囲で認知症の人やその家族を応援するのが認知症サポーターです。サポーターの数はこの10年で500万人を超え、目標を達成しました。今後は、社会全体で認知症の人とその家族を支え、サポーターも行政も一緒にあって、誰もが安心して暮らせる地域づくりにつなげるのが求められています。

\*このシリーズは、あなたとあなたの周りにいる人の間にあなたかなつながりが生まれることを願い、人権について考えるきっかけになることを目的としています。

お問い合わせは

人権啓発広報委員会

( 880・6569 ) まで